



頭部の取り付けが終わり、人形に衣装を着せる仕上げの作業。きらびやかな武者人形がまもなく完成する。

## 今年の干支にちなみ 猿頭の連獅子が登場

人形作りは、昔からその道にたけた人物が担ってきた。古文書をひもとくと「細工人」(現在の人形師にあたる)

として何人かの名前が繰り返して現れます。

この流れをくむのが、町内で理髪店を営む岩堀薫さん。第4丁目。本業の傍ら50年以上にわたって磨いた腕と、完成度の高さが評判です。「人形作りには『これで終わり』というゴールがない。手の込んだ仕事だけにやりがいがあり、毎年何かしらの創意工夫をこらします。今年は申年。干支にちなんで、小獅子を猿の顔にした連獅子を、生まれて初めて作ったんです」と話します。

## 少子化の波にのまれ 難しくなる人材確保

歴史を重ねてきた三国祭はいま、少子化や中心市街地空洞化の問題に直面しています。

「やま」に乗り太鼓をたたく『囃し方』の不足は深刻。囃し方は元来、各地区で地元小学生を募集するのが習わしでしたが、子どもが少なくなれば当然、選ぶことも難しくなります。

「地区や国籍を問わず『乗



今年岩堀さんが手がけた武者人形の頭部。力強い表情が大衆を魅了する。



町内の中元区から奉納された「やま」。乗っているのは猿獅子人形。(写真提供/徳田文男さん)

越前若狭の歴史を紡ぐ

# ふくい 祭り紀行

## 港町に初夏を告げる 「三国祭」の魅力に迫る

## 練り歩く迫力の山車 高さ10m超の時代も

響きわたるお囃子の音、威勢のいい若衆の掛け声、そして勇壮な人形たち。5月19日から21日まで開かれる「三国祭」は、大山昨命がまつられた山王宮(＝三国神社の前身)への信仰から、江戸時代にその原型がつけられたと

いわれます。

魅力は何といっても、町内6区がそれぞれ趣向を凝らして披露する「やま(山車)」。観光ガイドボランティアグループ「きたまえ三国」の寺岡賢一朗さん(北本町1丁目)は、「人形最上部の高さが約6.5m。明治中期には10mを超えていたそうです。当時は三国神社の前に立たせるだけだったが、『せっかく作るなら歩かせよう』と、車屋台に乗せての『やま曳き』が始まりました」とその歴史を話してくれました。

## 転倒の経験あれども 現在まで人が人せ

「やま」の数は、町村合併や町名改正、地区の財政状況などで増減しています。現在は合計6基ですが、戦前には8基、江戸時代には10基もの「やま」が三国神社に奉納されたとの記録もあります。

「やま」の存在感を象徴する人形も、昔に比べてすいぶん小ぶりになっています。それには、大きく二つの理由があります。

一つは、「やま曳き」を安全に行うため、車屋台の重心を下げなければならなかったこと。もう一つは、電気と電話の発達。町内にある電線や電話線を「くぐって通れる」大きさにする必要があったのです。

それでも、まれに転倒することもあるそうです。「私も何回か見ましたよ。でも、倒れる前にみんなが一斉に逃げるから、けが人は一度も出ていませんね」と寺岡さん。これも、神様の御加護なのでしょう。



明治40年の三国祭。2階建ての家を壁に超える人形が、三国神社的に勢ぞろい。(写真提供/みくに龍雄館)

## information

三国祭/5月19日(水)~5月21日(金)  
●場所/三国神社(三国町山王)  
●問合せ/三国神社事務所  
TEL.0776-81-2514